

原 著

子どもの処置への付き添いに対する親の思い

—乳幼児の採血・注射場面における親の思いの比較—

細 野 恵 子 齊 藤 唯

名寄市立大学

「紀 要」 第6巻 抜 刷

2012年 3 月

子どもの処置への付き添いに対する親の思い

—乳幼児の採血・注射場面における親の思いの比較—

細野 恵子^{1)*}, 斉藤 唯²⁾

¹⁾ 名寄市立大学保健福祉学部看護学科, ²⁾ 芽室町保健福祉センター

【要旨】 本研究の目的は、子どもの処置に付き添った場合と付き添わなかった場合での両場面に対する親の思いと各場面における親の思いを比較し、親のニーズを捉えた対応を検討することである。両場面の経験をもつ親を対象に自作の自記式質問紙により 2010 年 6～8 月に、処置の付き添いに対する親の希望や思いに関する調査を実施した。その結果、付き添いに対する親の意向は「希望する」6 割、「希望しない」1 割、「どちらともいえない」3 割であった。思いの比較では、処置に付き添った時の方が安心感や医療者への信頼感は強く、付き添わない方が不安は強く子どもをよりかわいそうに感じる事が示された。また、親も子どもの処置に参加する権利を求めており、子どもと親の意向を必ず聞いて欲しいという意見が示され、子どもと親のニーズに即したケアや思いを尊重する関わりの重要性を認識することにつながった。

キーワード: 採血・注射, 乳幼児, 親, 付き添い, 思いの比較

I. 緒言

イギリスでは 1959 年に The Platt Report (保健省) の中で、病院における子どものトータルケアの理念 (Ministry of Health) を明確にした。これ以降、小児看護における医療処置では子どもの意志を尊重する関わりが重視されてきている。日本においては子どもの権利条約が批准された 1994 年以降、プレパレーションの探求が活発に行われてきた (勝田ら 2001; 松森ら 2004)。また、親が子どもの処置場面に参加することの意義や有効性を示す報告 (込山ら 2001; 渡辺ら 2004) もあり、子どもの処置場面で親の存在の重要性 (蝦名 2005) が明らかにされている。ところが、小児の医療処置場面に親が参加する環境はまだまだ十分とは言いきれず (平岩ら 2008)、子どもの処置場面では親を退席させて子どもと医療者だけで行われることも多い。また、子どもの処置における家族の付き添いに関しては、医療者の方が家族よりも非常に低い認識を示し、子どもの処置場面で家族の必要性に対する認識のずれが報告されている (蝦名 2005)。

先行研究において、子どもの処置場面に同席した

親の思いや認識、室外で待つ母親の思いは示されている (中松ら 1999; 藪本 2005; 細野ら 2009) が、処置場面に“付き添った・付き添わなかった”という両経験を有する親の思いを確認し比較する報告は少ない。また、処置場面に親が同席することの有効性は明らかにされているが、子どもの医療処置に対する親の思いをより具体的に把握し、親の思いを尊重する姿勢で関わることは、子どもへのより効果的なケアの検討につながると思われる。

II. 目的

子どもの処置に付き添った場合と付き添わなかった場合での両場面に対する親の思いと各場面での思いの比較を明らかにし、親のニーズを捉えた対応を検討するための基礎資料を得る。

III. 方法

1. 対象

小児科外来への受診、あるいは小児科病棟への入院の経験がある乳幼児 (0～6 歳) の親で、子ども

2011 年 9 月 16 日受付: 2012 年 12 月 28 日受理

*責任著者

住所 〒096-8641 名寄市西 4 条北 8 丁目 1

E-mail: hosono@nayoro.ac.jp

の処置に付き添った場合と付き添わなかった場合の両場面の経験をもつ親とした。

2. 調査方法

調査は、先行研究（遠藤ら 2008）を参考に作成した自作の自記式質問紙により実施した。小児科外来を受診あるいは小児科病棟に入院する子どもの親に対し、病院スタッフから調査依頼書と調査票、返信用封筒を配布してもらった。返信用封筒に入れた調査票は、小児科外来及び小児科病棟に設置した回収箱へ記載者自身で投函してもらい、後日研究者が回収した。

3. 調査内容

調査の概要は、子ども自身の処置の経験回数、処置の付き添いに対する親の希望、処置に付き添った時と付き添わなかった時の親の思い、基本的属性等である。

子どもの処置に対する親の希望理由および意見については、自由記載を依頼した。親の思いの比較に関しては、「かわいそう」、「心配」、「不安」、「辛い」、「安心感」、「医療者への信頼感」、「(処置をやり遂げるといふ) 子どもへの期待」という7項目について、“付き添った場合”と“付き添わなかった場合”の二場面に対するそれぞれの回答を得た。選択肢は1：とてもそう思う、2：ややそう思う、3：あまりそう思わない、4：全く思わないの4段階で、該当する番号に○をつけてもらった。

4. 調査期間

調査は、平成22年6月～8月までの約3ヶ月間とした。

5. 分析方法

量的データは、記述統計による単純集計およびWilcoxonの符号付順位検定を行った。解析にはSPSS 17.0 for windowsを使用し、有意水準は5%とした。自由記載による質的データは、内容分析を行った。

6. 倫理的配慮

本研究は研究者が所属する名寄市立大学倫理委員会及び調査対象施設の倫理委員会の審査を受け承認を得た。

対象者には、調査の趣旨、内容、プライバシーの保護、協力や辞退への自由意志の尊重、協力を辞退しても受ける診療に影響のないこと、調査結果は本研究の目的以外には使用しないこと、研究内容を公表する場合は個人が特定されないことを書面で説明

し、回収箱への投函をもって同意が得られたと判断した。

IV. 結果

1. 対象の背景

調査票配布数150部に対し、協力が得られたのは140部（回収率93.3%）であった。その中で、子どもの処置に付き添った場合と付き添わなかった場合の両場面の経験をもつ親は65名（有効回答46.4%）であった。本研究では、両場面を経験する親の思いを比較する目的から、両経験を有する親を分析対象とした。分析対象は65名で、その概要は以下の通りであった（表1）。親の属性は母親64名（98.5%）、父親1名（1.5%）、平均年齢（mean ± SD）は32.1 ± 4.8（年齢の幅：23～41）歳で、20歳代30.8%、30歳代61.5%、40歳代6.2%、無回答1.5%であった。子どもの平均年齢は2.8 ± 2.0（年齢の幅：0～6）歳で、0歳代10.8%、1～2歳代38.5%、3～4歳代24.6%、5～6歳代26.2%であった。これまでに子どもが受けた処置の回数は、「2～5回」が20名（30.8%）、

表1. 対象の背景 n=65 (%)

項目	結果
保護者の属性	
母親	64名 (98.5)
父親	1名 (1.5)
保護者の年齢	
20歳代	20名 (30.8)
30歳代	40名 (61.5)
40歳代	4名 (6.2)
無回答	1名 (1.5)
子どもの年齢	
0歳代	7名 (10.8)
1～2歳代	25名 (38.5)
3～4歳代	16名 (24.6)
5～6歳代	17名 (26.2)
これまでに受けた処置回数	
1回	0名 (0.0)
2～5回	20名 (30.8)
6～9回	17名 (26.2)
10回以上	28名 (43.1)
処置への付添の希望	
希望する	38名 (58.5)
希望しない	7名 (10.8)
どちらでもない	20名 (30.8)

「6～9回」が17名(26.2%),「10回以上」28名(43.1%)で、今回が初めてという対象者は全くいなかった。

2. 子どもの処置の付き添いに対する親の意向

子どもの採血・注射の処置場面における付き添いに対する保護者の意向は「希望する」38名(58.5%),「希望しない」7名(10.8%),「どちらともいえない」20名(30.8%)であった。

3. 付き添いに対する親の意向理由

(1) 処置の付き添いを「希望する」理由

採血・注射施行時の付き添いを“希望する”理由については、35名の親からの自由記載が得られた。分析の結果、【子どもの安心感の確保】【状況把握のための親の希望】【親自身のための希望】【子どもを思いやる親の思い】【心配する親の気持ち】【受動的な態度】【安全の確保】【親自身の安心感の獲得】【親

としての役割意識】の9カテゴリーが抽出され、それぞれに1～7のサブカテゴリーが含まれていた(表2)。

(2) 処置の付き添いを「希望しない」理由

採血・注射施行時の付き添いを“希望しない”理由については、7名の親からの自由記載が得られた。分析の結果、【親の付き添いによる甘えの増強】【医療者に委任】【親の辛さ】【希望しない】の4カテゴリーが抽出され、それぞれに1～6のサブカテゴリーが含まれていた(表3)。

(3) 処置の付き添いに対し「どちらともいえない」理由

採血・注射施行時の付き添いに対して“どちらともいえない”理由については、17名の親からの自由記載が得られた。分析の結果、【親自身の葛藤】【個

表2. 処置の付き添いを“希望する”理由

カテゴリー	サブカテゴリー
子どもの安心感の確保	子どもの安心感 子どもの不安軽減 子どもの恐怖感軽減
状況把握のための親の希望	様子を見たい 状態を知りたい どのようにされているのか気になる 処置を自分の目で見たい わが子の対応を見たい どんなことをしているのか知りたい 失敗の状況を見ておきたい
親自身のための希望	付き添いたい 親自身が側にいたい 一緒に頑張りたい
子どもを思いやる親の思い	そばにいてあげたい 付き添ってあげたい 声をかけてあげたい
心配する親の気持ち	心配 不安の解消 かわいそう 居ても立ってもいられない
受動的な態度	抱っこの指示 看護師の指示 看護師の指示に従う行動
安全の確保	暴れると困る やり直しはかわいそう
親自身の安心感の確保	万が一を心配 見ていれば安心
親としての役割意識	親としての役割

別の状況に応じた対応】【甘えの増強による処置の妨げ】【親の思い込み】【わからない】【医療者に委任】の6カテゴリーが抽出され、それぞれに1～10のサブカテゴリーが含まれていた(表4)。

4. 付き添いに対する親の思いの比較

子どもの処置に付き添った場合と付き添わなかった場合での違いについて、7つの視点から親の思いを比較したところ、「かわいそうに思う」、「不安を

表3. 処置の付き添いを“希望しない”理由

カテゴリー	サブカテゴリー
親の付き添いによる甘えの増強	親がいると甘える 甘えて泣く 甘えて暴れる 甘えて余計に嫌がる 甘えて倍の時間かかる 暴れて採血できなくなる
医療者に委任	医療者に任せたい 母親まで敵と思われそう
親の辛さ	見ているのが辛い
希望しない	自らの希望なし

表4. 処置の付き添いに対し“どちらともいえない”理由

カテゴリー	サブカテゴリー
親自身の葛藤	そばにいてあげたい、でも見ているのは辛い 付き添って安心させてあげたい、でも痛がる姿を見るのは辛い 甘えるのでいない方がいいのかも、でも心配 近くにいてあげたい、でもいない方が甘えない 泣く姿は見たくない、でも気になる
個別の状況に応じた対応	時と場合による 子どもの具合に応じて 子どもの経験による違い 母親と一緒にの方が頑張れるのか 子ども一人の方が頑張れるのか 安全性を考慮した判断 どちらともいえない
甘えの増強による処置の妨げ	いると甘える 甘えて泣く 親を見て泣く 助けを求めて泣く 年齢が小さいとかえって泣く 抱っこをせがむ そばにいと大暴れする 暴れて処置の妨げになる スムーズに注射が出来ない いない方が適切に出来る
親の思い込み	子どもだけが連れていかれるものという思い込み 親は付き添わないものという思い込み
わからない	迷う気持ち わからない
医療者に委託	医療者に任せて良い

感じる」, 「付き添うことで安心できる」, 「医療者への信頼感」の4項目において有意な差が示された(表5)。すなわち, 子どもの処置に付き添った時の方が「安心感」や「医療者への信頼感」はより強くなり, 付き添わなかった時の方が「漠然とした不安」, 子どもを「かわいそう」と感じる気持がより強くなるという結果が明らかになった。

5. 子どもの処置に対する親の意見

子どもの処置に関して親が日頃感じていることとして, 様々な意見が寄せられた。<親の希望>としては, 処置に付き添うかどうかは事前に必ず親子に確認してほしい, 処置には出来るだけ一緒につきたい, 針を刺すまでの時間を短く・手際良く・1回で終わってほしい, 子どもに話かけあやしながら行ってほしいなどであった。<信頼感>を感じる医療者は時間をかけて子どもに説明や説得をしてくれる人であり, <不満なこと>は“外で待っていて下さい”と言われていたり, いきなり押さえつけられること, 針を刺してから血管を探すこと, 注射する(針を指す)までの時間が長いことなどであった。

V. 考察

複数回の処置を経験している乳幼児の親に対して, 子どもの処置に付き添うことを“希望する”親は6割, “希望しない”親は1割, “どちらともいえない”親は3割で, 希望する親が圧倒的に多いこと

が確認された。この結果は, 先行研究(中松ら1999; 藪本2005; 細野ら2009)においても同様の傾向が報告されており, 一般的な親の反応と捉えて良いと思われる。

付き添う・付き添わないの両場面における思いの比較では, 付き添った時の方が親自身の安心感や医療者への信頼感は増し, 付き添わなかった時の方が不安は増強し子どもをよりかわいそうに感じる結果が示された。

付き添いに関する親の思いとしては, 以下のような内容が示された。付き添いを希望する親の場合は, 子どもの側にいながら親自身が処置場面を見て子どもの様子や反応, 処置の状況など, 何が行われているのかを詳細に確認しながら心配を払拭し, 親子共に安心感を得たいと感じている。また, 処置場面に共に参加することで子どもと一緒に頑張りたい, そばにいてあげたいという親ごころも感じられる。さらに, 親が付き添うことでより安全な状況が確保出来るのではないかと, 親の役割として付き添うことを意識しているという役割意識もうかがわれた。付き添いを希望する親の大部分は主体的な考えを示す一方で, 受け身的な意向もあり, 子どもの処置に関する情報提供とともに, 意見交換のできる場の必要性も感じられた。付き添いを希望しない親の場合は, 子どもの処置がスムーズに行われることを願うものがほとんどであり, 処置を受けて泣く子どもを見る辛さが示されており, 非協力的な姿勢による意見は

表5. 処置の付き添いに対する保護者の思いの比較¹⁾

項目	付き添った場合	付き添わなかった場合	P値
子どもがかわいそうだと思う気持ち	2.21 ± 1.06	1.90 ± 1.24	0.032
子どもの恐怖感に対する心配	2.22 ± 1.08	1.92 ± 1.29	0.075
処置に対する漠然とした不安感	3.05 ± 1.04	2.46 ± 1.31	<0.001
処置に「付き添うあるいは付き添わない」 ことに対する辛さ	2.56 ± 1.14	2.31 ± 1.17	0.094
処置に「付き添うあるいは付き添わない」 ことに対する安心感	1.76 ± 0.78	3.19 ± 1.04	<0.001
医療者に対する信頼感	1.50 ± 0.95	2.18 ± 1.07	<0.001
子どもが「処置をやり遂げる」 ことに対する信頼感	1.56 ± 1.13	1.70 ± 1.11	0.219

¹⁾ 平均値±SD

見当たらなかった。どちらともいえないという親の場合は、親自身の葛藤する思いやケースバイケースでの対応が必要という柔軟な考えが示され、複数回の処置を経験する親の特徴が反映されたと思われる。どちらの意見からも思いの比較結果と同様の傾向がうかがわれ、経験に基づくありのままの思いが反映されたと考えられる。

貴重な意見としては、子どもと親の意向を必ず聞いて欲しい、子どもへの丁寧な説明が医療者への信頼感につながる、処置は手際よく短時間で的確に終わらせ、親も子どもの処置に参加する権利を求めていることが寄せられた。これらはいずれも親の率直な意見であり、処置場面に限ったことではないと感じられるもので、真摯に受け止め日常のケアに反映させていく必要がある。小児看護に携わる看護者として、子どもと親のニーズに即したケアや親の思いを尊重する関わりの重要性をあらためて認識することが出来たと思われる。

VI. 結論

1. 子どもの処置場面の付き添いに対する親の意向は「希望する」58.5%、「希望しない」10.8%、「どちらともいえない」30.8%であった。
2. 処置の付き添いを希望する理由は、【子どもの安心感の確保】【状況把握のための親の希望】【親自身のための希望】【子どもを思いやる親の思い】【心配する親の気持ち】【受動的な態度】【安全の確保】【親自身の安心感の獲得】【親としての役割意識】の9カテゴリーが抽出された。
3. 処置の付き添いを希望しない理由は、【親の付き添いによる甘えの増強】【医療者に委任】【親の辛さ】【希望しない】の4カテゴリーが抽出された。
4. 処置の付き添いに対しどちらともいえない理由は、【親自身の葛藤】【個別の状況に応じた対応】【甘えの増強による処置の妨げ】【親の思い込み】【わからない】【医療者に委任】の6カテゴリーが抽出された。
5. 親の付き添いに対する思いの比較では、処置に付き添った時の方が安心感や医療者への信頼感はより強くなり、付き添わなかった時の方が不安や子どもをかわいそうと感じる気持ちがより強くなることを示された。

謝 辞

本研究に理解を示し調査に快くご協力頂きました、A 地域のお子様とご両親の皆様様に深謝申し上げます。

文 献

- 蝦名美智子 (2005) 子どもと親が安心して医療を受けられるための医師・看護師・コメディカルの役割と協働 - 子供から信頼される医療とプリパレーション. 小児保健研究 **64**: 238-243.
- 遠藤ゆう子, 渡辺真由美, 根本恵美 (2008) 子どもの臨時入院時の処置同席に関する母親の意識. 第39回日本看護学会論文集小児看護 **39**: 23-25.
- 勝田仁美, 半田範子, 蝦名美智子, 二宮啓子, 半田浩美, 鈴木敦子, 檜木野裕美, 鎌田佳奈美, 筒井真優美, 飯村直子, 込山洋美, 村田恵子 (2001) 検査・処置を受ける幼児・学童の“覚悟”と覚悟に至る要因の検討. 日本看護科学会誌 **21**: 12-25.
- 込山洋美, 筒井真優美, 飯村直子, 蝦名美智子, 二宮啓子, 半田浩美, 片田範子, 勝田仁美, 鈴木敦子, 檜木野裕美, 村田恵子 (2001) 検査・処置を受ける子どもと親のずれ. 日本小児看護学会誌 **10**: 9-16.
- 平岩洋美, 福嶋友美, 大西文子 (2008) 乳幼児の採血・注射時に親が同席することの現状と看護師の認識. 日本小児看護学会誌 **17**: 51-57.
- 細野恵子, 市川正人, 上野美代子 (2009) 小児科外来で採血・点滴を座位で受ける乳幼. 児に付き添う家族の認識. 日本小児看護学会誌 **18**: 52-56.
- 松森直美, 二宮啓子, 蝦名美智子, 片田範子, 勝田仁美, 小迫幸恵, 笹木忍, 松林知美, 中野綾美, 筒井真優美, 飯村直子, 江本リナ, 鈴木敦子, 檜木野裕美, 高橋清子, 来生奈巳子, 福地麻紀貴子 (2004) 「検査・処置を受ける子どもへの説明と納得」に関するケアモデルの実践と評価 (その2) - 子どもの力を引き出す関わりと具体的な看護の技術について. 日本看護科学会誌 **24**: 22-35.
- 中松己志子, 山崎博美, 恒川幸美, 扇原益美 (1999) 持続点滴施行時の親の思いと児の反応. 第30回日本看護学会論文集小児看護 **36**: 71-73.
- 藪本和美 (2005) 患児の点滴・採血処置に対する母親の思い. 第36回日本看護学会論文集小児看護 **36**: 113-115.
- 渡辺裕子, 今田千佳子, 田中亮子, 木菱寛子, 井上みゆき (2004) 子どもの点滴施行に付き添った母親の体験. 第35回日本看護学会論文集小児看護 **35**: 170-172.

Parents' Feelings Regarding Attending Their Children's Treatment - Comparison of Parental Feelings when Children Undergo Blood Collection or Receive an Injection -

Keiko HOSONO^{1)*}, Yui SAITOU²⁾

¹⁾ Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare Science, Nayoro City University

²⁾ Memuro Town Center of Health and Welfare

Abstract: The objective of this study was to compare parents' feelings in regard to being present or not when their children undergo minor medical procedures in order to ascertain how to meet parents' needs. The survey involved parents who had experience of being both present and not present during these procedures and was carried out between June and August 2010 using our unique self-completion questionnaire. The survey was designed to investigate parents' wishes and feelings regarding accompanying their children during treatment. The results showed that 60% of parents "wished to attend treatment", 10% "did not wish to attend treatment," and 30% were "undecided." The comparison of feelings revealed that the parents had a higher sense of reassurance and trust for healthcare professionals if they attended treatment, whereas parents felt more anxiety and sorrier for their children if they did not attend treatment. In addition, parents wished to have the right to be present during the treatment of their children and commented that healthcare professionals should always ask children and parents what they wanted. These results underlined the importance of the care meeting the needs of children and parents, and the relationship respecting the feelings of them.

Key words: Blood collection/injection, infants, parents, attending, comparison of feelings

Received September 16, 2011; Accepted December 28, 2011

* Corresponding author (E-mail:hosono@nayoro.ac.jp)